

なければならなかった。

馬齡薯や人參を求めてやってくるソ連人の言葉が通じず、こぼめば恐ろしい目に合うのである。

生活様式の違いで靴のまま室内にはいつてきたソ連兵をとがめて射殺された人、言葉が通じないための誤解で射殺された隣人を目のあたりに見たとき、これが敗戦国なのだと思います。

二十三年になって漸く引揚げることができると知らされたときはどんなに裸でもいい、とにかく帰りたい、帰るんだとそのことだけを考えて真暗な貨物列車の中も重なり合ってもいい日本に帰れる嬉しさで一杯でしたが、帰国して待ちうけていたものは無一文の引揚者にとっては冷たい世間でしょうかありませんでした。

夫の消息を知るまでの不安と、やっと岩見沢の炭鉱にいくことを知ってたどりついたが、満足な着替えもなく着のみ着のままの私に夫のシャツを貰ってセーター替りに着たり軍隊払下げの毛布でオーバーを作っては寒さを凌ぐ生活でした。

どんなに戦後といっても土地の人は穴があけば継ぎ当

てにする端切れくらいは十分持っていました引揚者にはそれさえありません。

こんな私達を見る目は冷たく、貧しいことは悪いことなのか、私達は一片の物乞いをしたことも、盗みをしたこともなく、何をしたというのでしょうか。

戦争という名のもとに耐えて耐えて青春もなくすべての私有財産を捨てて引揚げなければならなかったのは自分のせいではないのに。

こんな思いも歳月とともに風化していくといわれますが、私の心は永久に風化も忘却もあり得ないことです。

姉は目の前で銃殺

北海道 大谷 輝子

その頃の私はまだ十八歳、三月に学校を卒業して親元を遠く離れ、豊原鉄道局に勤めて五か月、月に一回の休日には友達と、あの当時は交通が不便だったが二十里以

上もある砂利道を地下たびと鉄かぶとをかぶり、それでも両親に逢いたい気持ちで帰って来たものです。

食べ物といったら大豆だけ、毎日が空腹でつらかったことを思い出されます。それでも毎日欲しがりません勝つまではと、心に決めた子供心にも頑張ったものでした。

そして昭和二十年八月十五日戦争は終わったのです。私はすぐ親元に帰れると思ったところ、鉄道員は最後まで任務に励む様にいわれ駅で終戦と同時に疎開が始まり、あの焼けつくような暑さで毎日上敷香方面よりの引揚列車。今思い出しても地獄の世界です。

私はようやく自由な身となり家に帰ったら家族全員が今日大泊に行ったとのことでした。私一人しょんぼりしていると隣のおじさんが体が不自由なために家族と一緒に北海道に行けず迷惑をかけるとのことでした。自殺をしてしまったのです。

子供心に自分もこのように自殺をすと思うたら一人で涙が流れて母さんと泣き叫んでいたとき、夜中に馬車の音で外へ出て見ると、両親と妹達が長浜村に帰って

来ました。母が言うには私一人おいて、どうしても北海道に渡ることが出来なかった。と言ってくれました。そのときは本当にうれしかった。

それからはまた地獄の毎日でした。毎日の暑さと自分の家はソ連兵に追い出され、知らない家に泊まり歩く、食糧もなく毎日が悲しい日々でした。

私の姉が当時十九歳、女性が一番美しいときに頭は丸坊主男の姿で半年以上も二階や地下のむろに逃げ隠れておりましたが、昭和二十一年四月にとうとう見つかり母親の目の前で銃殺されてしまったのです。娘だからの一言で、生涯忘れることが出来ません。

何時引揚げかあてのない生活でしたが、樺太にも春が訪れ、きっと北海道に行ける日を夢見て毎日一生懸命働いてソ連の人達と働きました。

私達親子は二十二年五月の末に引揚げて、あの夢にまで見た函館に上陸しました。姉のお骨だけを大事に大事に抱いて来ました。妹二人は引揚げの際栄養失調でじくじくになりました。

妹達も学校に行かず、他の家に子守にやられ親と離れ

どんなにか淋しかったことでしょう、今は引揚者と白い目でみる人もあまりいませんが、あの当時は何かと引揚者とそういう目で見られ悲しいときもありました。

私達兄妹は十三人でしたが、今は六人になりました。

両親も亡くなり母は今年で十七回忌になります妹達と樺太をいつも思い出しております。

元氣だったらまだまだ楽をさせてやりたかったと思ひ残念でなりません。特に母は苦勞ばかりで私達子供のために頑張って本当にありがとう、私は三十八年間看護婦として今日まで頑張りました、今年で定年を迎えました、母のように、これからも頑張りたいと思っております。

沈没した小笠原丸に家族を乗せて

北海道 須藤 昭 一

戦争末期の昭和二十年、あこがれの海軍にはいるべく、海軍志願の手続きを取った。第一志望、航空兵。第

二志望、一般水兵。第三志望、機関兵として願書を提出した。

戦局急を告げていた七月始、第一次試験が八月二十四日との通知を受けた。母は強く反対したが、十三歳で志願していた人が何人もおり十六歳で早くはないと、私は耳をかさなかつた。しかし八月十五日の終戦とソ連軍真岡上陸との報に、予想もしなかつただけに衝撃を受けた。

さらに特定の男子及び全部の婦女子に早急に引揚げるよう通達があつた。我が家も引揚げ先が決定するまで時間がかかつた。私は父と残り母妹第四人の六人が母の実家の青森県に決まつた。持てるだけ背負えるだけの荷物をまとめ追われるように大泊港へ向つた。

八月十八日の大泊新埠頭は晴天で暑かつた。母達は見知らぬ大勢の人と引揚船を待った。岸壁には泰東丸が着岸していた。出港に時間があるのか、乗組員の一人が海中に飛びこみ水泳を楽しんでいた。大泊旧埠頭には間断なく艦船が出入港をくり返し稚内上陸の引揚者を運んでいた。新埠頭には何時引揚船が入港するのか誰も知ら